

## 親業に関する認知尺度作成の試みⅡ

—Parent Satisfaction Scale について—

乾原 正・宇恵 弘

### I はじめに

親の養育行動が、子どもの発達のみならずさまざまな面に影響を及ぼすことは、これまでも多くの研究者が指摘してきたことで、改めて述べるまでもない。しかし、親の養育行動は、多くの要因が相互に関連し、影響しあいながら発現してくるものであって安易に親の責任に帰すことはできない。

近年、ライフスタイルの変容と相俟っていよいよ少子化の時代を迎えるようになってきた。Cook, West と Hamner (1982) は、女子大学生の親業に対する態度について1972年と1979年の比較研究を行っている。その結果、1979年では子どもの数の少ないこと、あるいは子どものいないことを望み、また配偶者の選択に際しても親業の問題など考慮しないということが顕著になってきているという。Blake (1979) も少子化の問題について、結婚を拒否したり、延期する、あるいは結婚後も子どもを欲しない大人が増大していることを指摘している。

一方、このような核家族化・少子化に従って、幼い子どもと接触する機会や育児行動を観察する機会の少ない環境で育ってきた女性たちが母親になる時代を迎えるようになってきている。そうした母親の多くはわが子の育児にさまざまな不安や心配事を経験し、一部に虐待などの深刻な事態をも惹起しているように思われる。母親の育児不安については、子どもの側の要因をも考慮しなければならないが、一般的には育児に対する社会的なサポート体制や母親として

の役割意識，養育行動の要因も重要なことである。

そうしたことから最近，親の養育行動に関する認知をとりあげた研究が多くみられるようになってきている。Johnston と Mash (1989) が指摘するように，これまでのところ，親の認知に伴う養育行動の差異を明確にするところまで至っていないけれども，親業に関する認知の多面的な特質を明らかにしようという試みがなされてきている。Dix, Ruble, Grusec と Nixon (1986) は，親の養育観や子どもの年齢，あるいは子どものしつけに及ぼす要因について論じ，Newberger と Cook (1983) は，虐待的・拒否的な母親たちが親としてのモラルの未熟さ，責任感の欠如および子どものもつ特性や個性についての認識不足を指摘している。また，Azar, Robinson, Hekimian と Twentyman (1984) は，虐待的・拒否的な母親たちは，子どもの行動についての期待が非現実的で問題解決能力に劣るということを見いだしている。その他，self-perceptions (Williams et al, 1987), self-esteem (Bugental, 1987) との関連を指摘する研究もある。

このような状況の中で，親業の認知に関する尺度の開発も進められてきている。先に，乾原 (1994) が日本語版の作成を試みた Campis, Lyman と Pentice-Dunn (1986) の Parental Locus of Control Scale (PLOC) は，self-efficacy など 5 因子を含む 47 項目からなる質問紙である。また，Guidubaldi と Cleminshaw (1985) は，Spouse Support, Child-Parent Relationship, Parent Performance, Family Discipline and Control, および General Satisfaction の 5 つの因子がそれぞれ 10 項目を含む，計 50 項目からなる親業に伴う満足感を測定する尺度 Cleminshaw Guidubaldi Parent Satisfaction Scale (CGPSS) を作成している。Guidubaldi らによると，「親業に伴う満足感は，親となるかどうか，あるいは家族数を増やすかどうかを決める際により中心的な役割を果たすものであり，ライフスタイルや人生を決める新たな特徴と仮定される」という。また，親の役割についての満足感は，子どもとの相互交渉に費やす時間のみならず，強化の活用や体罰，その他と明らかに関連するように思われるとし，「子どもたちの社会化に及ぼす親の養育行動は親の満足感と密接に関連す

ら」と述べている。そして、その妥当性についての検討結果から、この尺度はさまざまな親業の問題に関わる専門的な仕事に有用であると結論づけている。

Mouton と Tuma (1988) は、問題行動をもつ子ども20名を含む67名の2歳から10歳の子どものもつ母親を対象に、この CGPSS と PLOC などを施行し、問題行動をもつ子どもたちの母親は統制群の母親に比べ、親の役割に対する満足感が低く、子どもの行動に対する責任を受け入れ難く、また統制することができ難いという結果を得て、これら親の認知を測定する尺度は、養育行動に問題をもつ親のサポートや治療にとってより有効であると述べている。

Johnston と Mash (1989) も、親の親業に対する認知が親子の關係に重要な役割を演ずるものであるから、関連する認知的側面についての測定尺度を開発し、養育に関する親の態度と実際の養育行動との関連を実証する必要があると述べている。そして、どの年齢の子どもにも、あるいは臨床例の場合にも、意味のある親の認知の一つの側面として、親が受ける自己効力感 (self-efficacy) と親業から得る満足感 (satisfaction) を含む自尊心 (self-esteem) が重要な要因となるとみなしている。self-efficacy とは、社会学習理論の中核をなす概念の一つで、やがて生ずる状況にうまく対処することができるかどうかという確信のことである (Bandura, 1982)。養育行動について考えれば、親が子どもの問題を扱うことに有能で自信があると感じる程度についての認知のことである。Johnston らはこのような観点から、親としての self-efficacy と satisfaction を含む養育行動に関する self-esteem の実用的な尺度として、17項目からなる Parenting Sense of Competence (PSOC) を開発し、親としての self-esteem を測定する有効な方法であると報告している。

## Ⅱ 目 的

今回の調査研究は、先に行った Campis らによる Parental Locus of Control Scale を翻訳した質問紙に関する報告に続き、親業に関する親自身の認知の様相を探るための測定法を検討することを目的し、Guidubaldi と Clemin-

shaw (1985) によって作成された50項目の尺度, Cleminshaw-Guidubaldi Parent Satisfaction Scale を翻訳し, わが国の母親に試みた結果を因子分析し, 親業に関する親の認知を測定する尺度作成の基礎資料とするものである。

### Ⅲ 方 法

**調査対象者** 大分県下の公立中学校の生徒の母親69名と大阪府下の私立幼稚園の園児の母親170名の合計239名である。

**調査期間** 調査は1994年5月に行った。

**手続き** 上記の調査対象者には, それぞれのクラス担任から生徒や園児を通して質問紙を配布し, 家庭で母親によって記入の後, 再び生徒や園児を経て担任のもとに回収するという方法をとった。

**質問紙の構成** 調査対象者の母親には, 養育行動に関する母親の考えを反映するよう, Guidubaldi と Cleminshaw による Parent Satisfaction Scale を翻訳したもの(以下, KG-PSS とする)を用いた。その際, わが国の実状にそりよう文書表現などに配慮したつもりである。KG-PSS の回答は, 「全くそう思う」から「全くそう思わない」までのリッカート式5段階尺度で求め, それぞれに5点から1点を与え, 項目の合計得点を尺度得点とした。なお, 50項目のうち, 22項目を逆転項目とし, 得点が高いほど満足感の大きいことを示すものとみなした。質問紙にはその他に Parental Locus of Control Scale (KG-PLOC) と self-efficacy に関する質問紙(以下, S-E とする)を加え, 同時に施行した。なお, 調査は無記名形式で行った。

### Ⅳ 結果と考察

はじめに, Parenting Satisfaction Scale としての KG-PSS の各項目について, 通過率等の分析を行い, Table 2 にあげた10項目を削除した。残る40項目について因子分析(主因子法, Promax 回転)を行ったが, 固有値の減少, 因

Table 1 KG-PSS の因子分析結果

項目\因子	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
45 夫が子どもによく関わり合っていると満足している	.88	.28	-.26	-.02	-.04	.81
47 夫が子どもに示す関心の強さには満足している	.82	.33	-.24	-.04	-.07	.70
44 夫は、子どもの発達についてよく知っているので、親として安心だ	.78	.26	-.22	-.21	-.14	.62
49 夫が子どもを上手に扱ってくれるので満足している	.75	.24	-.29	-.20	-.12	.58
46 子どもを育てる夫の責任感には満足している	.74	.33	-.26	-.02	-.04	.57
40 夫と子どもとの関係には満足している	.71	.33	-.31	-.08	.04	.53
42 夫が子どもとともに過ごす時間の量には満足している	.58	.12	.00	-.19	-.10	.40
25 夫は、子育てを人生における重要で貴重な部分を占めるものと考えていてくれるので嬉しい	.58	.37	-.26	.04	.12	.43
5 夫は、私が子どもの問題について話す時、ゆっくりときちんと聞いてくれるので嬉しい	.53	.33	-.24	-.10	.00	.32
10 夫にはもっと子どもと関わってもらいたい	-.46	.05	.27	.26	.06	.32
41 夫の子どもに対するしつけ方には不満を感じている	-.68	-.30	.58	.22	-.04	.62
2 夫は、子どもに対してあまり力になってくれていない	-.69	-.27	.48	.14	.00	.55
43 夫にもっと親の役割を果たしてもらいたい	-.75	-.18	.34	.22	.00	.59
36 子どもが私に示してくれる愛情や愛着の程度に満足している	.27	.72	-.14	.06	-.14	.54
15 子どもへの私に対する態度に満足している	.22	.70	-.29	-.16	-.13	.53
6 子どもが私に示す協力的な態度に満足している	.35	.65	-.19	-.14	-.16	.45
12 子どもと私の親子関係には満足している	.17	.57	-.02	-.15	.08	.39
14 子どもは、私と一緒にいることを楽しみ、喜んでいる	.10	.56	-.10	.23	-.15	.41
21 子どもは、私をよい親だと思っている	.15	.54	-.13	-.08	-.18	.31

16	子どもの育て方に関しては、これでいいと思っている	.32	.54	-.20	-.33	-.22	.40
7	子どもは、私の幸せにいつも関わっていると思う	.11	.48	-.10	.09	.10	.27
17	子どもがいると、いつまでも若々しい気分でいられるので嬉しい	.15	.48	-.05	-.10	-.09	.24
4	子どもに対する親の努力は、長い目で見れば報われる	.18	.39	-.13	.02	.17	.21
32	子どもは、私の人生に刺激と変化を与えてくれる	.19	.38	-.19	.18	.03	.21
29	私が子どもに示す愛情表現は、まずいのではないかと思う	-.23	-.48	.23	.25	.16	.30
30	総じて、私は、親であることに幸せを感じる事ができない	-.27	-.56	.27	.00	.16	.35
23	夫は、方針をくるくる変えるので子どもと私は困ってしまう	-.16	-.23	.67	-.03	.24	.52
8	夫は、子どもにどなることしかできないが、それは私にとっては不愉快である	-.38	-.27	.63	.16	.02	.44
48	夫は、子どもに対してもっと一貫性のある育て方をすべきだ	-.46	-.23	.58	.14	-.02	.43
19	夫は、完全主義者で子どもに対して期待しすぎる	-.08	-.22	.47	-.04	.37	.38
50	夫は、子どもに対してもう少し辛抱強くあってほしい	-.38	-.05	.46	.04	.11	.30
20	私は、子どもに口やかましくいい過ぎると思うことがある	-.03	.03	.07	.66	.09	.46
9	子どもに対してどなりちらしている自分にあきれることがある	-.12	-.06	-.03	.58	.10	.35
33	子どもをしつける時、その方法に満足できないことがよくある	-.22	-.27	.01	.51	.33	.38
31	子どもは、私の友人の前でも私をいららさせるようなことをよくする	-.04	-.20	.00	.40	.24	.23
37	親というものには、労力と心痛がつきものだ	-.09	.12	.03	.34	.10	.15
22	子どもに対してもっと目をかける必要があると思う	-.12	-.02	.24	.36	.64	.53
34	子どもに対してもっと目をひからす必要があると時々思う	-.09	-.18	.21	.18	.37	.19
28	子どもは、私が年老いた時、私を慰め生活を保証してくれると思う	.20	.28	-.04	-.14	.29	.24
24	子どもに費やす時間はこれでよいと思う	.22	.25	-.07	-.27	-.67	.52
<b>他の因子を無視した場合の因子負荷量</b>		<b>7.83</b>	<b>5.62</b>	<b>3.45</b>	<b>2.89</b>	<b>1.89</b>	

註) \_\_の項目は逆転項目

子の解釈の可能性を考慮し、5因子を抽出した。回転後の因子パターンをもとに、 $|.30|$ 以上の負荷量を中心に因子解釈を行った。この結果を Table 1 に示した。5因子の累積寄与率は、全分散の52.95%であった。第1因子は、「夫が子どもによく関わり合ってくれていると満足している」「夫が子どもに示す関心の強さには満足している」「夫は、子どもの発達についてよく知っているので、親として安心だ」などの13項目で、それらの中の10項目は Guidubaldiらの CGPSS の Factor 1 Spouse Support に含まれるものであることから『夫のサポート』と命名した。第2因子は、「子どもが私に示してくれる愛情や愛着の程度に満足している」「子どもの私に対する態度に満足している」「子どもが私に示す協力的な態度に満足している」など、CGPSS のFactor 2 と Factor 5 の項目を多く含むものであることから『母子関係の満足度』と命名した。第3の因子は、「夫は、方針をくるくる変えるので子どもと私は困ってしまう」「夫は子どもにどなることしかできないが、それは私にとっては不愉快である」など、いずれも CGPSS では Factor 4 に含まれた夫のしつけに関する5項目で構成されているので『夫のしつけ』と命名した。第4因子の5項目は、「私は、子どもに口やかましくいい過ぎることがある」「子どもに対してどなりちらしている自分にあきれることがある」など、CGPSS の Factor 3 の3項目を含む項目で『母親としての振る舞い』とした。最後に、第5因子

Table 2 削除項目

18	私の心を混乱させるほど、子どもが私を嫌っているように思える
35	子どものユーモア感覚は、楽しいものである
38	子どもの養育に一貫性をもっと必要だと思う
1	私は、子どもに対して辛抱強くありたいと思っている
3	私は、もっとよい親でありたいし、親として、もっといろいろできればよいと思う
11	子どもは、私のいうことをよく聞いてくれるので嬉しい
13	子どもは、夫婦に多くの問題をもちこむ
26	子どもが成長して家を離れるまで、私は待てない
27	私の親は、どうすればよい親になれるかについて教えてくれた
39	結婚生活の中で一番しんどい時期は、子育ての期間中である

註) \_\_の項目は逆転項目

Table 3 Cronbach の  $\alpha$  係数

群\因子	F1	F2	F3	F4	F5	全項目
全体	.89	.87	.47	.58	.57	.82
I 群	.91	.88	.63	.40	.42	.84
II 群	.88	.86	.56	.45	.61	.80

は、「子どもに対してもっと目をかける必要があると思う」「子どもに対してもっと目をひからす必要があると時々思う」「子どもは、私が年老いた時、私を慰め生活を保障してくれると思う」「子どもに費やす時間はこれでよいと思う」の4項目で CGPSS の Factor 3 の3項目を含むものであることから、『子どもとの関わり』と名付けた。

なお、KG-PSS の内的一貫性を検討するために、Cronbach の  $\alpha$  係数を求めたところ、Table 3 に示す結果を得た。5つの因子のうち、第1因子と第2因子は内的一貫性が高いとみられるが、あとの3因子はそれらに比べると低くなっている。これについて、さらに中学生の母親（I群）と幼稚園児の母親（II群）のそれぞれについて算出したが、第1因子『夫のサポート』、第2因子『母子関係の満足度』、第3因子『夫のしつけ』および全体で中学生の母親の値が高く、第4因子『母親としての振る舞い』と第5因子『子どもとの関わり』で幼稚園児の母親の値が高くなっている。

以上のような結果は、Guidubaldi と Cleminshaw によるものとは必ずしも一致するものではない。わが国とアメリカの母親の認知に相違があるのか、あるいは質問項目の翻訳で文意に齟齬が生じたものなのか、今後他の尺度などとの関連を含め吟味すべき課題であろう。

次に、中学生の母親群と幼稚園児の母親群に分け、KG-PSS の5因子の得点について比較した。両群の平均値、標準偏差および両群間の差についての検定結果は Table 4 に示した通りである。第5因子を除く4つの因子および全体でI群よりII群の平均値が高く、t検定の結果、第2因子『母子関係の満足度』では5%の水準で、第4因子『母親としての振る舞い』および全体では1%の



Table 4 両群間の各因子得点の平均値・標準偏差

	F1			F2			F3		
	n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD
I群	62	56.63	11.07	64	64.84	9.01	61	32.62	4.95
II群	162	58.42	9.89	166	68.58	8.39	162	32.90	4.48
t test	t=-1.17 n.s			t=-2.97 p<.005			t=-.40 n.s		

  

	F4			F5			Total		
	n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD
I群	71	22.04	3.17	69	17.86	2.59	75	165.97	55.20
II群	167	24.06	2.99	170	17.41	2.96	173	191.66	35.26
t test	t=-4.68 p<.001			t=-1.09 n.s			t=-3.71 p<.001		

水準で有意差が認められた。

I群とII群の母親についての身上調査的な資料が整っていないため十分な解釈はできないが、II群すなわち幼稚園児の母親はI群の中学生を持つ母親より親業に満足していることがうかがえる。母親の世代の相違を反映していること、あるいはII群の母親にとっては子どもも幼く、相対的に母親の統制を受け入れ易い時期にあることなどによるものと考えられる。また、子どもの行動が活発になる時期でもあり子どもへの関心も一層強くなるものとみられる。

一方、第I群の分散が第II群に比べ第4因子を除く各因子で大きく、とくに全得点の偏差値は、55.20と35.26で分散比が有意に高い( $F=2.43, p<.0001$ )。これは、中学生の母親の満足感に大きな個体差のあることを示すものである。子どもの発達とともに、子どもが示す行動特質が顕著になり、それに伴って母親の満足度が左右されるものと考えられる。

Guidubaldi と Cleminshaw は、PSS の得点が親の年齢、就業形態、学歴、収入、子どもの数や結婚年数などの身上調査項目とは関連しないと述べている

Table 5 5因子間の Pearson 相関係数

			KG-PSS			
			F 1	F 2	F 3	F 4
全 体	KG-PSS	F 1				
		F 2	.75			
		F 3	.89	.65		
		F 4	-.10	.02	-.11	
		F 5	-.19	-.19	.06	.51
I 群	KG-PSS	F 1				
		F 2	.81			
		F 3	.92	.71		
		F 4	-.11	.16	-.16	
		F 5	-.07	-.19	.07	.64
II 群	KG-PSS	F 1				
		F 2	.73			
		F 3	.88	.62		
		F 4	-.14	.01	-.11	
		F 5	-.22	-.18	-.05	.53

Table 6 KG-PSS 5因子と KG-PLOC 4因子および  
S-E 2因子間の Pearson 相関係数

群	KG-PLOC・S-E		KG-PLOC				S-E	
	KG-PSS		F 1	F 2	F 3	F 4	F 1	F 2
全体	KG-PSS	F 1	-.27	-.02	-.12	-.16	-.19	-.25
		F 2	-.32	-.09	-.12	-.08	-.26	-.23
		F 3	-.23	-.05	.01	-.08	-.04	-.05
		F 4	-.11	-.22	.20	.42	.16	.10
		F 5	-.09	-.16	.18	.26	.34	.25
I 群	KG-PSS	F 1	-.38	-.08	-.03	-.00	-.21	-.18
		F 2	-.44	-.14	-.04	-.13	-.27	-.11
		F 3	-.23	-.17	.04	-.05	-.07	.01
		F 4	.04	-.18	.13	.33	.06	.11
		F 5	-.10	-.26	.15	.27	.24	.26
II 群	KG-PSS	F 1	-.20	.02	-.15	-.23	-.19	-.27
		F 2	-.24	-.02	-.16	-.08	-.25	-.26
		F 3	-.24	-.02	.00	-.08	-.04	-.08
		F 4	-.13	-.18	.24	.44	.26	.14
		F 5	-.11	-.14	.19	.26	.37	.24

が、母親の養育に対する意識、態度などに関するわが国のこれまでの研究では、母親の年齢、就労形態、学歴、さらには母親の生活一般における充実感、自己評価などが影響すると指摘されている。また、年齢については、母親の年齢だけでなく、それに伴う子どもの年齢、とりわけ第1子の年齢や成長とも関連するとみられている(大日向 1982, 青木ら 1986)。

また、5因子間の関係、その5因子とKG-PLOCやS-Eとの関係をPearsonの積率相関係数でみた結果をTable 5およびTable 6に示した。因子間の関連では、第1因子と第2、第3因子、第2因子と第3因子、第4因子と第5因子間で高い相関を示しているが、それ以外では低い逆相関となっている。このような結果はⅡ群におけるよりもⅠ群においてより強い傾向が認められる。KG-PLOCから抽出した4因子すなわち第1因子の「親の責任」、第2因子の「内的統制」、第3因子の「外的統制」および第4因子の「親の無能感」との関連では、「母親としての振る舞い」と「親の無能感」が比較的高い相関を示しているが、「夫のサポート」「母子関係の満足度」さらに「夫のしつけ」の各因子は「親の責任」と逆の関係にある。また、その傾向はⅡ群により強く認められる。さらに、S-Eとの関連では、「一般的効力因子」「社会的効力因子」ともに第1、第2、第3の因子は逆相関を、第4と第5因子は正の関係にあることを示している。Campisら研究においても親業における効力感とShererら(1982)の一般的効力因子とは負の相関を示し、一般に高い自己効力感をもつ親は親業に効力を感じないためであると述べている。

以上、GuidubaldiとClemishawによるParent Satisfaction Scaleを翻訳した尺度を中学生と幼稚園児の母親に施行し、因子分析を行い因子構造を中心に検討を試みた。項目分析においても、また因子構造についても必ずしも望ましい結果を得たということとはできないが、親業に関する満足感についての基礎的研究としてある程度の示唆が得られた。改めて述べるまでもなく、子どもの正常な発達には母親の適切な養育行動が必須である。母親の養育態度、養育意識がどのように現実の養育行動に影響しているのか、その関連について多面的に考察することが必要である。にも関わらず、親の養育についての認知を総括

的に査定しようとする研究はほとんどない。多くの困難さによって測定する適切な手だてを持っていないということであろう。今後さらに質問項目について検討し、先の KG-PLOC などとともに親業に関する総合的な認知尺度の作成をすすめて行きたい。

### 引用文献

- 青木まり・松井 豊・岩男寿美子 1986 母性意識から見た母親の特徴—ライフ・ステージ, 自己評価, 充実感との関係から—心理学研究, 57, 4, 207-213.
- Azar, S. T., Robinson, D. R., Hekimian, E., & Twentyman, C. T. 1984 Unrealistic expectations and problem-solving ability in maltreating and comparison mothers. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 52, 687-691.
- Bandura, A. 1982 Self-efficacy in human agency. *American Psychologist*, 37, 122-147.
- Blake, J. 1979 Is zero preferred? American attitude toward childlessness in the 1970's. *Journal of Marriage and Family*, 41, 245-257.
- Bugental, D. B., & Caporaal, L., & Shennum, W. A. 1980 Experimentally produced child uncontrollability: Effects on the potency of adult communication patterns. *Child Development*, 51, 520-528.
- Campis, L. K., Lyman, R. D., & Pentice-Dunn, S. 1986 The Parental Locus of Control Scale: Development and validation. *Journal of Clinical Child Psychology*, 15, 260-267.
- Cook, A. S., West, J. B., & Hamner, T. J. 1982 Changes in attitudes toward parenting among college women: 1972 and 1979 samples. *Family Relations*, 31, 109-113.
- Dix, T., Ruble, D. N., Grusec, J. E., & Nixon, S. 1986 Social cognition in parents: Inferential and affective reactions to children of three age levels. *Child Development*, 57, 879-894.
- Guidubaldi, J., & Cleminshaw, H. K. 1985 The Development of the Cleminshaw-Guidubaldi Parent Satisfaction Scale. *Journal of Clinical Child Psychology*, 14, 293-298.
- 乾原 正 1994 親業に関する認知尺度作成の試み—Parental Locus of Control Scale について—関西学院大学文学部60周年記念論文集 59-71.
- Johnston, C., & Mash, E. 1989 A Measure of Parenting Satisfaction and Efficacy. *Journal of Clinical Child Psychology*, 18, 167-175.

Mouton, P. Y., & Tuma, J. M. 1988 Stress, locus of control, and role satisfaction in clinic and control mothers. *Journal of Clinical Child Psychology*, 17, 217-224.

Newberger, C. M., & Cook, S. J. 1983 Parental awareness and child abuse: A cognitive-developmental analysis of urban and rural samples, *American Journal of Orthopsychiatry*, 53, 512-514.

大日向雅美 1982 母性意識の発達変容について—母親の教育歴・就労形態・年齢別の分析—日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 298-299.

——乾原 正 文学部教授——

——宇恵 弘 大学院研究員——